

Case5 (2021.1.18 報告)

60代 女性

主訴: 食欲不振

診断名: 胃がん、リンパ節転移

関わった医療機関(施設): 癌クリニック、がん在宅緩和ケア支援センター、鍼灸院

診断初期に自然療法と整体を選択し、その後、病勢が悪化したため現代医学的治療を始める。そのまま病勢が治まらない状態で鍼灸院に来院された。患者の状態から自治体の「がん在宅緩和ケア支援センター」と連絡を取り、医師の許可を得て数回施術するも逝去された症例。

寸評: ターミナル期の患者への鍼灸施術は、IPW(多職種連携)における鍼灸の専門性が発揮できる分野として、DAPA(医鍼薬地域連携研究会)や学術大会でも度々言及があった。

患者のナラティブ(物語)からは、様々な意見が交換された。特に、患者の選択肢の問題への意見が多く、鍼灸師は患者に適切なタイミングで適切な選択肢が提示できるように勉強する必要がある、という意見に同意があった。

今症例は、鍼灸院から自治体のがん在宅緩和ケアサービスの介入へつながった事例でもあり、ターミナル期の鍼灸施術において連携は不可欠である事が再認識できた。